

序文

ジョン・ディア

ヘンリ・ナウエンは、現代において最もよく読まれている霊的著作家のひとりである。一九九六年に亡くなるまで、ヘンリは霊的生活、祈り、孤独^{ソリテュード}、聖餐、死についての手に取りやすい小著を何冊も残し、数多くの読者に刺激と励ましを与えてきた。ヘンリの著作は多くの点で、第二ヴァチカン公会議以後、教会がイエスと聖書に対して示してきた新たな関心の焦点を具体的に表現している。

しかしヘンリについて私が最も心ひかれるのは、彼が個人的なレベルでこれらの著作を生きようとしていたことだ。その大きな霊的ヴィジョンと、煩雑さに満ちた日々の現実とを結びつけ、福音を自分の生活のなかで、そして世界のなかで実現させようとしたのである。この努力は誰にとってもそうであるように、ヘンリにとっても痛みを伴うものだった。

それは危険をおかすこと、前に進むこと、世界のなかで神が自分のために備えてくださった場所を探し求めることを意味していた。オランダ人の司祭で心理学者でもあったヘンリは、評判のよい著作家・講演者であると同時に、ノートルダム大学やイエール大学、ハーヴァード大学における人気の教授でもあった。ところがそのキャリアの頂点で、ヘンリはアカデミックな世界から立ち去った。トラピスト会修道院での生活やラテンアメリカでの宣教師としての生活の可能性を探ったのち、ヘンリはトロントに移り住み、デイブレイクのラルシュ共同体の一員となって、障害のある人々に仕えることになった。ヘンリは福音の価値観を生き、用いることによって世界と関わろうとした。福音の価値観をあらゆることに当てはめるといふこの稀有な態度こそ、ヘンリが靈性や靈的生活について語ることの信頼性をいっそう高めているように思う。

ヘンリ・ナウエンは痛みと暴力に満ちた世界に、瞬時も目を閉じることなく向きあった。そして世界を見据え、愛と癒やしと平和の言葉を差し出した。これは一見、感傷的な態度に見えるかもしれないが、実は揺るぎない社会的・政治的靈性に根ざすものだった。ヘンリはイエスに従う者として、平和と正義の支配する神の国をまず探し求めなければならぬことを知っていた。そして自分の靈的著作は、神の国のあらゆる局面を映し出すもので

なければならぬことも知っていた。つまり、個々人の救いだけではなく、社会と世界の
変革をも映し出さなければならぬのだ、と。この大きな視点こそ、ヘンリの著作を唯一
無二のものとしている。

靈性に関する本や靈性の教師、いわゆる「靈的生活」を究める道は数多く存在する。し
かしここ二十五年以上にわたって平和と正義のために尽力してきたイエズス会会員として、
私はこれらの多くの外的外れであると感じている。なぜならこれらは、戦争による世界的危
機、核兵器、貧困、飢餓、エイズ、環境破壊の脅威の問題を扱っていないからだ。これら
のいわゆる「政治的問題」は生死に関わる問題であり、何よりもまず靈性に関わる問題な
のである。だからこそイエスは、貧しい人々のための正義、地上における神の平和の国の
ヴィジョンの実現に向けて、あれほどまでの情熱をもってご自身をささげられたのだ。ま
た、ご自身と同じように体制的・帝国主義的不正義に正面から立ち向かう、平和をつくる
人々の共同体の形成のために、ご自身の命を明け渡されたのだ。

公然と悪に抗い世界に平和をつくり出すことは、信頼に足るあらゆる靈性の核心である。
残念なことに、靈的生活と、戦争や貧困、核兵器の問題との重大な結びつきを意識してい
る者は少ない。私たちの多くは、自分の個人的な靈的経験を、ビジネス、選挙政治、爆撃、

国家「保安」といった「現実世界」から切り離している。私たちはたぶんトラブルを起こしたくないのだ。自分の教会の会衆をそのような問題から隔てておきたいし、愛国心がないと非難される危険をおかしたくないのだ。しかし世界にはびこる暴力を前にしながら、何の行動も起こさず沈黙しているならば、預言者の精神をもって非暴力のイエスを証しすることを、自分では気づかないうちに放棄してしまうことになる。私たちは、正義と平和の支配する神の国と連携するよりも、戦争と世界規模の不正義に満ちた現状を選んではまう。それはまるで、祈りや現代の靈性について書いたり語ったりするためには、イラクでの戦争や中東での暴力、ロシアラモスで現在も続けられている核兵器の開発（そのあいだにも学校や雇用、住宅、食料、医療のための予算が削減されているというのに）は無視しなければならぬ、とでもいうかのようなのだ。こうした問題は、痛ましいことではあるけれども靈的生活には関係ない、と私たちの文化は告げている。私たちの個人的な祈りと、朝の新聞で読む恐ろしい出来事とは何のつながりもないのだ、と。

しかしヘンリは「つながりがある」と、本書で主張している。ヘンリは自分の個人的な神との出会いの経験、牧会心理学における洞察、自分がキリストに従う者であるという理解を、周囲の貧しい人々や傷ついた人々だけでなく、現代における世界規模の不正義とも

結びつけている。ヘンリにとってこれらの洞察は、本書を書き始めるずっと前に始まりその死の日まで続いた自分自身の旅がもたらした実りだった。

一九六〇年代にヘンリは車を運転して米国南部に向かい、キング博士やその他多くの人々とともにセルマで壮大な行進に加わった。この行進は公民権運動において大きな転換点となった。その後ヘンリはふたたび南部を訪れ、何万もの人々とキング博士の葬列に連なった。一九七〇年代にはいくつもの反戦集会で語り、コネティカット州にあるトライデントミサイル搭載潜水艦基地で平和のための徹夜の祈りに参加した。一九八〇年代にはニカラグアとグアテマラの戦闘地域に赴き、米国内を巡回して、レーガンがニカラグアの反政府右派勢力コントラに資金援助をしていたことに抗議し、核兵器の軍拡競争への批判を訴え、ネバダ州の核実験場では抗議者たちに加わった。第一次湾岸戦争の直前にあたる一九九一年一月十四日、ヘンリはワシントンDCで一万人の聴衆を前に、差し迫った戦争を食い止め、キリスト者は平和を貫く立場をとるようと呼びかけた。その後まもなく、ヘンリは私に宛てた手紙のなかで次のように書いた。「この世界のなかでイエスの平和を徹底して説くことがいかに難しいかを、これまでにはいほど痛感しています。問題を解決しようとするとき、世界はなんと暴力に傾きやすいことでしょう」。

ヘンリは、靈的生活が自分をつ平和のために働くようにと招いていることを知っていた。神から愛されている子であるという自分の使命を十分に果たすために、自分は平和をつくる者とならなければならない、戦いに明け暮れる世界のなかで平和の声とならなければならない、と。一九九〇年代前半、反核のデモを行った私が刑務所に収容されていたとき、ヘンリは私を力づけようと長い手紙をくれた。その手紙によると、ヘンリはラルシュでの自分の働きを、反戦と反核の証言であると自覚していたという。そして自分は、非暴力と武装解除を求めて広がりつつある運動の一部でありたいと願っていた。また、戦争と兵器に対して非暴力の抵抗を示す自らの態度を明らかにするためには、逮捕され投獄される危険をおかす覚悟がある、とまで書いていた。正義と平和のために闘いたいと願うヘンリの姿勢は、故意に無視されているとまでは言わないにしても、今なお多くの人に誤解されていると私は思う。しかし私から見れば、この姿勢が他の多くの平和運動家との決定的な違いを生んでいるのだ。この姿勢こそが、ヘンリの著作に真摯な力を与えている。その姿勢とはすなわち、貧しい人々や周縁に追いやられた人々のなかに自らを置くという立脚点、正義と平和を求める運動との真の連帯、同時代の多くの戦争に対して異を唱えるという公の立場である。

ヘンリ・ナウエンは平和の生を生き、平和のヴィジョンを實現に向けて推しすすめ、平和の道を説こうとした。一九八〇年代前半、高まる冷戦の緊張のさなかで、ヘンリは教会と平和運動のためにこの短い本を書き、行進や平和への訴えをする人々がその行動を平和の核心——平和の神の「顔」であるイエス、そして神の聖霊——に根づかせることができるようにと願った。ヘンリは政治的展望を、内なる靈的展望ほどには語らなかつた。人間を世界の滅亡の縁からひき戻す助けとなるのは、まず何よりも心の内なる回心であり、社会的、政治的、経済的変革はそれに続く、ヘンリは考えていた。

本書のいくつかの部分は、教会関係の小規模な雑誌に載せたものであり、ヘンリにはこれらをまとめて出版する余裕がなかつた。一九九六年のヘンリの突然の死のあと、私は雑誌に載つた記事を中心に、彼が平和と正義について書いた著述を集め、『平和への道』(The Road to Peace 邦訳＝廣戸直江訳、聖公会出版、二〇〇二年)として出版した。しかし、共同体についての章と「おわりに」を含めた本書の全文が出版されるのは、今回が初めてである。

ヘンリが生きていたなら、本書の内容を今の時代にあわせて書き換え、書き直し、平和をつくりだす靈性のほかの要素を書き加えたにちがいない。ラルシュに移り住んだ数年後、

ヘンリは「平和の道」(“The Path of Peace”)という小冊子を書き、ひき続き平和の霊性と取り組んだ。ヘンリはこの小冊子に、祈り、抵抗、共同体に加え、新しい要素を盛りこんだ。それは、傷ついた、弱く貧しく周縁に追いやられた人たちから贈り物を受け取るということだ。ヘンリはこのことを、ラルシュでの経験から——とりわけダイブレイク共同体にいた重い障害を抱える青年アダムとの関係から学んだのだった。ヘンリは次のように語る。貧しい人たちは世界の苦しみと不正義について教えてくれる。しかし何よりも、貧しい人たちは平和という神からの贈り物を私たちと分かちあってくれる。山上の説教にあるように、神からのこの贈り物を誰よりも先に受け取るのは、彼らなのである、と。(ヘンリの平和をつくりだす霊性をさらに深く知るには、『わが家への道』[*Finding My Way Home* 邦訳 工藤信夫訳、あめんどう、二〇〇五年] 所収のこの小冊子を、本書と併せて読むとよい。)

恐れと不安、戦争とテロリズムに満ちたこの混迷の時代にあって、ヘンリの平和のメッセージはかつてないほど必要とされている。二十年前に書かれたにもかかわらず、「恐怖に支配された家」というヘンリの表現は、現代の世界を今なおよく表している。新たな切迫感を帯びた言葉をもって、ヘンリは私たちに、恐れの家を出て愛と平和の家への道を歩もうと呼びかけている。そして私たちみなに、祈りと抵抗と共同体を通して平和のために

働こうと促す。

九・一一以後の世界にあつては、ヘンリの平和の靈性は非現実的、考えが甘いと退けられてしまうかもしれないが、彼は聖書の視点から書いているのである。ヘンリは靈性の探求者、導き手として、神が平和の神であり、私たちが「劍を鋤に打ち直し」「もはや戦いを学ばなくなる」ことを〔イザヤ書二・四参照〕望んでおられるのを知っていた。イエスが平和の道を歩き、弟子たちがご自分と同じように平和をつくる者となることを願つておられたのを知っていた。イエスは山上の説教のなかで「平和を造る人々は、幸いである／その人たちは神の子と呼ばれる」〔マタイ五・九〕と語つておられたのだから。これらの言葉は「私たちが今日キリスト者として生きるためのキーワードとなつている」と、ヘンリは「おわりに」のなかではつきりと書いている。靈性において成熟し、イエスの眞の弟子になりたいと願うならば、他の人々が何と言おうとも、私たちは戦争を孕み引き起こす文化に立ち向かい、平和をつくる者とならなければならない、とヘンリは語る。そして「現代においてキリストの靈のうちにある生を生きる」とは、「この世にあつて、破壊をもたらす力に決して与することのない道を選択すること」であると締めくくつてゐる。ヘンリがこのように語つたときから何年もたつが、この課題の緊急性は少しも薄れていない。

多くの読者がヘンリーの黙想に思いをめぐらせ、その言葉を深く心に刻み、その平和の知恵を社会と政治にどのように生かせるか考えるようになることを、私は願っている。そして何よりも、これらの読者が平和のために大胆な一歩を踏み出してくれることを望んでいる。ヘンリーのように、公の場で反戦、反核を語り、非暴力の社会を求める運動に参加してほしい。ヘンリーの生涯が示しているように、私たちが勇気をもつてこの霊的な旅に乗りだし、平和を求める存在、平和の声として闘いに加わるならば、私たちの霊性は深まり、私たちの生はよい実を結ぶだろう。

ヘンリーが教えてくれたように、福音の説く平和と非暴力の霊性を実践するならば、私たちは確かに、自分が神の愛する息子、娘であることがわかるはずだ。キリストの平和の与えてくれるこの祝福こそ、霊的生が意味することのすべてなのである。

二〇〇四年十月四日

アシジの聖フランチェスコの祝日

ニューメキシコ州マドリッドにて

ジョン・ディア